令和　5年　4　月　20　日

審査申請書

高島市民病院
人権推進・倫理委員会委員長　様

申　請　者
所　属　　高島市民病院

職　名　　看護師長補佐
氏　名　　中村　大介　㊞

審査対象	研究に使用するデータの管理方法について
課 題 名	食欲不振を有した新型コロナ感染症（COVID-19）患者への早期介入の必要性について
研究責任者	中村大介
分担研究者	川原春香　黒丸昌美　家守秀和　木下正太
備　　考	8月31日～9月1日開催の全国自治体病院学会での発表を考えています。4月30日までに申し込みます。

研究計画書

5南病棟　中村大介

1. 研究課題名	食欲不振を有した新型コロナ感染症（COVID-19）患者への早期介入の必要性について
2. 研究目的	2019年から発生した新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）は第8波と呼ばれるまで長期化している。当初から新型コロナ感染症病棟で従事し、様々な症例を経験したが、現在は入院適応が高齢者や妊婦、基礎疾患があり重症化リスクのある患者となった。 先行研究からも高齢患者の在院日数は様々な理由から長期化しやすく、在院日数の長期化はADLの低下や認知症の進行といった患者の予後にも悪影響を及ぼす。 COVID-19の特徴的な症状として、味覚障害や嗅覚障害、嚥下障害は広く知られており、併せて、隔離入院やPPEを着用した看護による普段の環境とは違う状況下での入院生活は、精神的にも食欲不振を起こしやすいのではないかと推察される。実際に、食欲不振を主訴として入院となった患者、入院中に食欲不振を訴えた患者は、令和4年度では全体の半数近くにも及び、食欲不振による食事摂取量の低下は患者の回復を遅らせ、ADLを低下させ、在院日数の遷延に影響を及ぼす一因となったのではないかと推察される。 今後、5類感染症に移行したとしても、高齢者のCOVID-19患者は入院が必要となるケースが多いと予想される。そこで、令和4年度のCOVID-19入院患者を対象に、食欲不振の有無と在院日数の遷延が関連したかどうかを明らかにすることで、早期介入のための判断材料となり、COVID-19患者の看護をする上で、延いては患者のQOL維持に有用であると考える。
3. 研究対象者	令和4年4月1日～令和5年3月31日までの期間で5南病棟にCOVID-19で入院し、退院（他病棟への転棟後の退院も含む）した内科患者は167名であった。その167名から、他疾患で入院中であった院内発生事例、入院時に誤嚥性肺炎を併発していた事例、死亡事例を除外した107名を対象者とする。

4. 研究方法	上記期間の対象患者のカルテを参照し、年齢、在院日数、食欲不振の有無（患者本人の訴え、介護者や家族の訴えのあるもの）、入院中の食事摂取量、入院時の COVID-19 肺炎の有無（重症度分類）、COVID-19 治療薬使用の有無などのデータを収集する。 得られたデータをもとに、在院日数に影響を及ぼす可能性のある入院時の COVID-19 肺炎の有無、COVID-19 治療薬使用の有無、食欲不振の有無をそれぞれ Mann-Whitney の U 検定を用いて有意差があるかどうかを比較検討する。
5. 予測されること	COVID-19 患者の食欲不振の有無は、在院日数の遷延に影響を及ぼす一因である可能性。
6. 倫理的配慮	以下を院内倫理委員会で承諾を得る。 1) 取得した個人情報は病棟内の鍵のかかる棚に保管および PC データはロックし、厳格に管理する。 2) データは個人が特定できないように数値化する。 3) 研究終了後、データは裁断処理する。 4) 得られたデータは研究以外の目的では使用しない。 5) 地域医療への貢献を目的で行う研究である